

小学校道徳教科書における自然災害

Natural Disasters in the textbook of moral education of elementary school

丸 橋 静 香*

Shizuka MARUHASHI

要 旨

本稿では、道徳科における防災教育の教材を考えるための準備的作業として、令和2年（2020年）に発行された小学校道徳科の教科書において、自然災害がどのように取り上げられているかを検討した。その結果、すべての教科書会社の教科書で自然災害が扱われていること、特に東日本大震災への言及が多いこと、災害時・後におけるボランティアなどの助け合いが道徳的価値として提示された教材が多いことが明らかとなった。

〔キーワード〕 道徳科、自然災害、地震、防災、教科書

I はじめに

近年、東日本大震災をはじめ自然災害が頻繁に生じている。災害の記憶を継承していくことや防災について、「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）はどのような教材を作成し、いかなる教育方法をとるべきだろうか。

本稿では、こうしたことを考えるための準備的作業として、現在の道徳科、なかでも小学校道徳科の教科書において、どのような自然災害がどのように取り上げられているか、どのような教材があるかについて明らかにし、その特徴を考察する。

先行研究において、防災と道徳科を関連付けた研究¹⁾は進んでいるが、「道徳の時間」から道徳科へ移行することで作成された小学校道徳科教科書が調査されたものはない²⁾。

II 調査の対象と方法

本稿では、文部科学省の検定をとり、令和2年（2020年）に発行された8社の小学校道徳科の教科書（学研『新みんなの道徳』、学校図書『かがやけみらい 小学校道徳』、教育出版『小学校道徳 はばたこう明日へ』、廣済堂あかつき『みんなで考え、話し合う 小学生の道徳』、

*附属教師教育研究センター

光文書院『小学道徳 ゆたかな心』、東京書籍『新訂 新しい道徳』、日本文教『小学道徳 生きる力』、光村図書『道徳 きみがいちばんひかるとき』)を調査の対象にしている。

これら8社の1年生から6年生までの教科書、計48冊について、自然災害がテーマとされている、ないしは言及されている47の教材を特定した(資料1を参照)。

資料1には、各教材のタイトルと概要、取り上げられた(ないしは言及された)自然災害、またその教材に関連付けられた内容項目(教科書出版社が設定したもの)を掲載している。

Ⅲ 結果

1. 取り上げられた自然災害

どのような自然災害が取り上げられたのか。結果は、表1のとおりである。教材において言及されている、あるいは明らかに取り上げられている自然災害を、計上している。一つの教材に複数の自然災害が言及されることもあるので、全体の合計は、全教材数の47より多く、57となっている。東日本大震災への言及が32と、全体の半数以上となっている。それに続くのは、阪神・淡路大震災の12、熊本地震の4、中越地震の3である。その他に、鹿児島豪雨、広島土砂災害、九州北部豪雨、北海道胆振東部地震も取り上げられていた。

表1 取り上げられた自然災害

災害	関東大震災	鹿児島豪雨	阪神・淡路大震災	新潟・中越地震	(中国)四川大地震	東日本大震災	広島土砂災害	熊本地震	九州北部豪雨	北海道胆振東部地震	計
発生年	1923	1993	1995	2004	2008	2011	2014	2016	2017	2018	
言及数	1	1	12	3	1	32	1	4	1	1	57

※一つの教材に複数の自然災害が言及されている場合があるため、合計が全教材数47よりも大きくなっている。

2. 学年ごとの違い

学年ごとで、自然災害の取り上げられ方は異なっているのか。表2のとおり、1年生1教材、2年生4教材と低学年ではあまり取り上げられないが、学年が上がるにつれて3年生8教材、4年生9教材、5年生10教材、6年生15教材と、自然災害を扱う教材が多くなっている。中学年以上は、平均すると各学年1教材以上、各社の教科書において自然災害が取り上げられている。

表2 小学校各学年で自然災害を取り上げた教材数

学年	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	計
教材数	1	4	8	9	10	15	47

3. 教科書出版社ごとの自然災害の取り扱い

出版社ごとの違いは、表3にまとめた。最も自然災害を多く取り上げているのは、日本文教出版の10教材、最も少ない廣済堂あかつきは2教材とばらつきはあるが、いずれの出版社の教科書にも、自然災害を扱った教材が掲載されている。

表3 教科書会社ごとの自然災害を扱った教材数

発行元	学研	学校図書	教育出版	あかつき	光文書院	東京書籍	日本文教	光村図書	計
教材数	4	5	5	2	9	7	10	5	47

4. 教材の内容

教材の内容はどのようなものか。本稿では、学習指導要領に示された内容項目との関連から整理した(表4)。なお、内容項目と教材の関連づけは、各教科書出版社が行ったものである。多く関連づけられている内容項目は順に、「勤労、公共の精神」(14教材)、「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」(8教材)、「感謝」(6教材)、「生命の尊さ」(6教材)、「節度、節制」(3教材)、「規則の尊重」(2教材)である。1教材のみ関連づけされているのは、「希望と勇気、努力と強い意志」、「親切、思いやり」、「家族愛、家庭生活の充実」、「よりよい学校生活、集団生活の充実」、「国際理解、国際親善」、「感動、畏敬の念」である。

以下、関連づけの多い内容項目から詳しくみていく。

表4 教材と内容項目との関連

内容項目	教材数 (括弧内は資料1の教材番号)	
A 主として自分自身に関する こと	節度、節制	3 (9,14,45)
	希望と勇気、努力と強い意志	1 (41)
B 主として人との関わりに関 すること	親切、思いやり	1 (23)
	感謝	6 (7,20,31,43,46,47)
C 主として集団や社会との関 わりに関すること	規則の尊重	2 (4,15)
	勤労、公共の精神	14 (2,5,6,8,13,17,22,26,28,30,32,37,42,44)
	家族愛、家庭生活の充実	1 (10)
	よりよい学校生活、集団生活 の充実	1 (39)
	伝統と文化の尊重、国や郷土 を愛する態度	8 (3,11,12,16,19,25,33,34)
	国際理解、国際親善	1 (1)
D 主として生命や自然、崇高 なものとの関わりに関すること	生命の尊さ	6 (18,21,24,27,35,38)
	感動、畏敬の念	1 (29)
	その他	2 (36,40)
計		47

※「その他」は、コラム教材で、内容項目と紐づけられていない教材。

(1) 「勤労、公共の精神」(14教材)

「勤労、公共の精神」に関連づけられた教材は、大きく3つのタイプに分類することができる。一つ目は、子どもたちが避難所でボランティアをする姿を描いたものである(2、5、17、22、28、30、37、44)(括弧内の番号は、資料1の教材番号。以下同様)。二つ目は大人のボランティア活動を描いたもの(13、26、42)、三つ目は震災時・後に自分の職務を全うする大人の姿を描いたもの(6、8、32)である。

1) 子どもたちのボランティアの姿を描いたもの

子どもたちのボランティア活動に関する資料のうち、次の3つは代表的なものと言える。①阪神・淡路大震災のあと、避難所において子どもたちが自発的にボランティア活動を行った様子を描いた「神戸のふっこうは、ほくらの手で」(2、44)。同じく、②阪神・淡路大震災のあと避難所となった学校で、教師の避難所運営を手伝った子どもたちの「ネコの手ボランティア」の様子を基にしたもの(30、37)。また、③東日本大震災のあと、背負いかご「もっこ」背負って高台に物資を届けた小学生姉妹の様子を描いた教材(5、28)。

2) 大人のボランティア活動の様子を描いたもの

大人のボランティアに関する教材は、教材番号13、26、42である。教材番号13は、東日本大震災後の、海中がれき撤去に関するボランティアの姿を描いたもの、教材番号26、42では、ボランティアにおいて「なにを、いかになすか」を逡巡する大人の様子が描かれている。

3) 職務を全うする姿を描いたもの

教材番号6は、東日本大震災当日に震災・津波に自らも遭いながらも、鉄道員として乗客を守ったことを、教材番号32は、地域の足としての海上タクシーを守り抜くという、自分の職務を全うした大人の姿を描いている。教材番号8では、地震で大きく損壊した熊本城の修理に関わった会社の人々の努力の姿が描かれている。

(2) 「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」(8教材)

「勤労、公共の精神」に続いて、多くの教材が関連づけられていたのが、「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」である。ここには、教材番号3、11、12、16、19、25、33、34の8教材がある。

主には、地元固有のもの(花火(3、34)、方言(11)、歌(12)、祭り(16)、城(25)、鉄道(33))の存在が、地元の人々を勇気づける様子が描かれている。

(3) 「感謝」(6教材)

「感謝」には、教材番号7、20、31、43、46、47が関連づけられている。教材は多様だが共通点は、命を助けた(助けている)ことへの感謝が主題になっていることである。過去の震災等を伝える石碑に伺える過去の人々(7)、震災後、東北にやっとの思いで石油を届けた人々(20)、土石流のなかりリーダーシップを発揮して人命救助に当たった人々(31)、被災地の復興に携わってくれている警察や自衛隊の人々(43)、震災時自分を庇って命を落とした祖母(46)、ユダヤ人を救った杉原千畝への感謝から設置された「スギハラ基金」(47)。これらへの「感謝」が扱われている。

(4) 「生命の尊さ」(6教材)

「生命の尊さ」には、教材番号18、21、24、27、35、38が関連づけられている。二つの教材が、家族を失った子どもの姿を描いている(24、27)。また、それ以外は、内容は多様だが、共通点は、死と対照的なかたちで「生命の尊さ」が際立たせられていることである。

(5) 「節度、節制」(3教材)

教材番号9、14、45の教材が関連づけられている。これらは、防災に向けて自分ができることを考えさせる内容になっている。

(6) 「規則の尊重」(2教材)

教材番号4、15が「規則の尊重」に関連づけられている。双方とも、阪神・淡路大震災時に、物資を受け取るために人々が列をつくっていることが写真で示されている。場所の秩序が、規則によって保たれていることを気づかせる教材と言える。

(7) 1教材のみ関連づけられたもの

内容項目「希望と勇気、努力と強い意志」(41)、「親切、思いやり」(23)、「家族愛、家庭生活の充実」(10)、「よりよい学校生活、集団生活の充実」(39)、「国際理解、国際親善」(1)、「感動、畏敬の念」(29)には、各1教材が関連づけられている。教材1では熊本地震が取り上げられているが、その他はいずれも東日本大震災に関連したものになっている。

(8) その他

内容項目と関連づけられていない教材は、教材番号36、40の2教材であった。これらは、これから起きるかもしれない地震等の災害に備えて、自分たちに何ができるかを考えさせる資料となっている。

IV まとめと考察

教科書調査からは、どの出版社の教科書にも、主に東日本大震災や阪神・淡路大震災を中心とした自然災害を扱った教材が掲載されていることがわかった。このことから、災害の記憶の継承や防災のための道徳教育の基盤は、一定は形成されていると言える。

内容に関して言えば、災害時あるいはそのあとのボランティアに代表される相互的な助け合いが、いわば道徳的価値として提示された資料が多かった。死と隣り合わせの自然災害を扱う上で、教材が希望的側面を描こうとするのは必然であるとも考えられるし、災害の記憶の継承という点で言えば、こうした教材の傾向には意義があるだろう。ただ、防災に向けて自分たちが今後何をなすべきかを考えることを促すという観点からの教材は少なかった。ゆえに教科書教材の傾向には一定の改善の余地があると言える。

参考文献

- 1) 谷村千絵(2020)「防災道徳の課題と可能性:現実世界の複雑さと当事者性に着目して」『鳴門教育大学研究紀要』第35巻、189～197頁。藤井基貴・生澤繁樹(2013)「『防災道徳』の授業開発に関する研究:「道徳教育」と「防災教育」をつなぐ授業理論と実践-」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第21巻、91～101頁。藤井基貴(2014)「災害道徳の教育-「防災道徳」授業の実践と哲学教育への可能性」『文化と哲学』静岡大学哲学会、第31巻、21～40頁。

- 2) 令和2年度発行の中学校道徳科教科書における震災に関する教材を調べたものに、次の文献がある。竹内識晃(2022)「教科書で知る〈震災〉:道徳科教科書の教材から」『聴く語る創る』(日本民話の会編)第29巻、130～136頁。

資料1 令和2年度刊行の小学校道徳科教科書における自然災害を取り上げた教材

番号	タイトル(教科書出版社、掲載学年) ・概要	自然災害	内容項目
1	<u>思いをこめて(学研3)</u> ・熊本地震で被災した子どもたちへ、ネパールからの応援の手紙／東日本大震災への各国からの応援。	・熊本地震 ・東日本大震災	C- 国際理解、国際親善
2	<u>神戸のふっこうは、ぼくらの手で(学研4)</u> ・阪神・淡路大震災後の避難所で、学校の先生や、大人たち、小さな子どもまでも自主的に手伝い合う姿を目にする「ぼく」／「ぼく」たちは、小さな子どもたちのために、本を読んだり、遊んだりボランティアをする。	・阪神・淡路大震災	C- 勤労、公共の精神
3	<u>復興への願い:フェニックス(学研5)</u> ・新潟県中越地震からの地域復興のために、長岡市民が奔走して作った大花火「フェニックス」／東日本大震災後には長岡から石巻に「フェニックス」が贈られた。	・新潟県中越地震 ・東日本大震災	C- 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
4	<u>どんな心が見えてきますか(学研6)</u> ・放置自転車や歩きスマホの写真と並んで(対照的に)、阪神・淡路大震災のあと「列をつくって、順番に飲料水などをもらっている」写真が示されている。	・阪神・淡路大震災	C- 規則の尊重
5	<u>姉妹で運ぶ物資と笑顔(学校図書4)</u> ・東日本大震災後、宮古市で、救援物資を竹のかご「もっこ」で背負って、高台の住民に配達をする姉妹／震災前に引越してきた際に親切にされた恩返しの気持ちもあった。	・東日本大震災	C- 勤労、公共の精神
6	<u>命を預かる鉄道員の使命:仙石線、あの日の一夜から(学校図書5)</u> ・東日本大震災の発生当時、仙石線に車掌として勤務していた「わたし」／津波からの避難の検討や、車中泊、避難誘導等、必死に職務に当たった。	・東日本大震災	C- 勤労、公共の精神
7	<u>記憶をつなぐ:災害と文化遺産(学校図書5)</u> ・過去の地震や津波被害等を伝える全国各地の寺社や石碑、現在ではそれらのデータベースも作られている／過去の災害情報を遺してくれた先人がいることを知り、未来に記憶を伝える必要性を考える。	・東日本大震災	B- 感謝
8	<u>復興のシンボルを私たちの手で(学校図書6)</u> ・大きく崩れた熊本城／復元工事にかかわった建設会社の緻密な努力。	・熊本地震	C- 勤労、公共の精神
9	<u>天災は忘れたころにやってくる(学校図書6)</u> ・防災週間にちなんで校長先生が紹介した物理学者寺田寅彦の防災・安全教育への啓蒙／それを踏まえて自宅の防災用品を点検する「ぼく」。	・関東大震災	A- 節度、節制
10	<u>おむかえ(教育出版2)</u> ・地震のあと、体育館で保護者の迎えを待つ「私」／ようやく姉が迎えにきたが、遅くなったことを責めてしまう／その後、姉や家族が大変ななか迎えに来てくれたことを知る。	・東日本大震災	C- 家族愛、家庭生活の充実

11	<u>やっべし (教育出版4)</u> ・東日本大震災のあと、石巻でボランティア体験をした先生が、当時のことを語ってくれた／石巻の人々が復興のために「やっべし」(「いっしょにやりましょう」という意味の方言)の気持ちで取り組んでいたと話してくれた。	・東日本大震災	C- 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
12	<u>希望と勇気をうたにのせて：東北うたの本 (教育出版4)</u> ・第二次世界大戦後、海銚義美は、東北を勇気づけるために多くの歌を作った／東日本大震災のあと、海銚がつくった歌の演奏会が各地で開かれ、被災地を勇気づけた。	・東日本大震災	C- 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
13	<u>青い海を取りもどせ (教育出版6)</u> ・大船渡のダイビングインストラクターの佐藤さんは、海のがれき撤去のボランティアをはじめ／ボランティアの輪が広がり、青い海が取り戻された。	・東日本大震災	C- 勤労、公共の精神
14	<u>安全について考えよう (教育出版6)</u> ・地震がおきたときを想定して、どのように行動するかを、学校での場合、近隣のおばあさんにあった場合について考えてみる。	・なし	A- 節度、節制
15	<u>やくそくやきまりを守って (廣済堂あかつき3)</u> ・阪神・淡路大震災のあと、列をつくって順番を守り炊き出しなどをうける人々の写真／さまざまなきまりは何のためにあるのか。	・阪神・淡路大震災	C- 規則の尊重
16	<u>高らかにひびけ (廣済堂あかつき6)</u> ・気仙町の祭り「気仙町けんか七夕」／東日本大震災後によく開催された祭りで、中学生が「けんか七夕たいこ」を披露し、町の人々を勇気づける。	・東日本大震災	C- 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
17	<u>わたしたちも しごとを したい (光文書院2)</u> ・隣町でおこった地震のため、町の大人たちが救援に行く／残った子どもたちは、自発的に町の役に立つしごとを始める。	・九州北部豪雨 ・広島土砂災害 ・東日本大震災 ・阪神・淡路大震災	C- 勤労、公共の精神
18	<u>うみねことたんぼぼ (光文書院3)</u> ・東日本大震災で大きな被害を受けた八戸市燕島／地震のあと元気を失ってしまった祖父／「わたし」と祖父は、燕島の、地震前と変わらない様子のうみねこと地面のたんぼぼに勇気づけられる。	・東日本大震災	D- 生命の尊さ
19	<u>こまったときは、おたがいさま (光文書院3)</u> ・東日本大震災後のボランティアの映像から、「ぼく」は祖父から「こまったときは、おたがいさま」の精神を教えてもらう／「ぼく」は、「こまったときは、おたがいさま」は日本人のすばらしい心だと考える。	・東日本大震災	C- 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
20	<u>石油列車、東北に向かって走れ！ (光文書院4)</u> ・地震被害のために、関東から東北に、石油が貨物列車で運べなくなった／貨物列車会社の人たちは、苦心のすえ、日本海周りで石油を届けた。	・東日本大震災	B- 感謝
21	<u>レスキュー隊 (光文書院4)</u> ・中国・四川省の大震災のときに活躍した世界各国のレスキュー隊／レスキュー隊の「多くの命をすくいたい」という思いを知る。	・四川大地震	D- 生命の尊さ
22	<u>明日へ向かって (光文書院5)</u> ・東日本大震災で大きな被害を受けた茨城県日立市／避難所で中学生が熱心にボランティアを行い、皆を勇気づけた。	・東日本大震災	C- 勤労、公共の精神
23	<u>命のおにぎり (光文書院6)</u> ・雪で車が渋滞・立往生／ドライバーたちを助けたのは、「命のおにぎり」／東日本大震災で被災し仮設住宅に住んでいる人々が、おにぎりをつくり、ドライバーたちに届けた。	・東日本大震災	B- 親切、思いやり

24	<u>負けないで (光文書院 6)</u> ・震災で、家族や友達を失った佐々木瑠璃さん／彼女ががれきの前で、トランペットで zard の「負けないで」を吹き、新聞に掲載／記事が演奏家の目にとまり、東京の大ホールで演奏することになる。彼女の演奏は皆に感動を与えた。	・東日本大震災	D- 生命の尊さ
25	<u>よみがえれ熊本城 (光文書院 6)</u> ・熊本地震で大きな被害を受けた熊本城／地元の新聞記者は、城の復興を願う市民の姿・様子に励まされ、伝える役目の重要さを感じる。	・熊本地震	C- 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
26	<u>いま、ほくにごできること (東京書籍 2)</u> ・東日本大震災のあと、自分に何ができるかを考える「ほく」。／避難所で、ボランティアをすることに。	・東日本大震災	C- 勤労、公共の精神
27	<u>おじいちゃん、おばあちゃん、見ていてね (東京書籍 3)</u> ・東日本大震災で、祖父と祖母を失った「ほく」は、毎日二人の写真に手を合わせる。／地震・津波後の避難のことも思い出す。	・東日本大震災	D- 生命の尊さ
28	<u>「もっこ」をせおって (東京書籍 4)</u> ・東日本大震災の津波で、家を失った姉妹は、地震後、高台の祖父の家での生活をする。／背負いかご「もっこ」で、高台に住むお年寄りに食料などを配達する手伝いをする。	・東日本大震災	C- 勤労、公共の精神
29	<u>一本松は語った (東京書籍 5)</u> ・東日本大震災の津波被害から、奇跡的に残った一本松／一本松は、自分が弱っていくなかで、土地の過去の歴史が忘れられないように、それを語る。	・東日本大震災	D- 感動、畏敬の念
30	<u>うちら「ネコの手」ボランティア (東京書籍 6)</u> ・避難所で、ボランティアをはじめた麻美と由希／働きに対し苦情もでるが、一生懸命働く二人。／避難所のお年寄りから喜ばれる。	・阪神・淡路大震災	C- 勤労、公共の精神
31	<u>土石流の中で救われた命 (東京書籍 6)</u> ・大雨による土石流の影響を受けた電車と乗客／近くにいた警察官二人の、命がけのリーダーシップにより、助けられる。	・鹿児島豪雨	B- 感謝
32	<u>小さな連絡船「ひまわり」 (東京書籍 6)</u> ・宮城県気仙沼と近くの大島をつなぐ海のタクシー「ひまわり」／東日本大震災時、津波から「ひまわり」を守り抜いた菅原さん／地震のあと、菅原さんの「ひまわり」は不通になった大島と気仙沼を結ぶ貴重な足として活躍した。	・東日本大震災	C- 勤労、公共の精神
33	<u>はしれ、さんりくてつどう (日本文教 1)</u> ・東日本大震災の津波で大きく破損した三陸鉄道の線路や橋／鉄道会社は懸命に復旧作業をする／鉄道の再開時、町の大人も子どもも大いに喜んだ。	・東日本大震災	C- 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
34	<u>花火に こめられた ねがい (日本文教 2)</u> ・新潟・長岡の花火大会には、平和や地域の安寧への願いがこめられている／中越地震や東日本大震災時にも復興への願いが込められた花火が打ち上げられた。	・新潟県中越地震 ・東日本大震災	C- 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
35	<u>助かった命 (日本文教 3)</u> ・大震災の直後、家族四人で避難する／途中、父と兄は、近所の家族を助けに行き、家族は離れ離れに／その後、救助を果たした父と兄に再開し、安堵する。	・阪神・淡路大震災 ・	D- 生命の尊さ

36	<u>地しんがおきたら (心のベンチ) (日本文教3)</u> ・「もし地しんがおきたら」どう振る舞うべきかを、教室、図書室、校庭、公園、道路、家の場合ごとに考える／近年、発生した地震(右記)や、将来予想される南海トラフ巨大地震が、紹介されている。	・新潟県中越地震 ・阪神・淡路大震災 ・東日本大震災 ・熊本地震 ・北海道胆振東部地震	※コラムのため、内容項目との対応なし
37	<u>ネコの手ボランティア (日本文教4)</u> ・震災後、女子4名は避難所で「ネコの手ボランティア」として活躍する。	・阪神・淡路大震災	C- 勤労、公共の精神
38	<u>「太陽のようなえがお」が命をつなぐ (日本文教5)</u> ・阪神・淡路大震災で、自分の喫茶店も含め大きな被害をうけた岡本さん／震災からわずかしか経っていないなか、小さなお店を再開する／岡本さんの笑顔が、地域の人々を元気にした。	・阪神・淡路大震災 ・東日本大震災	D- 生命の尊さ
39	<u>ぼくたちの学校 (日本文教6)</u> ・津波で校舎が使えなくなった小学校／隣町の小学校を借り、学校が再開する／ある日、下校のバスのなかで1年生が泣き始めると、誰からともなく校歌を歌いだした。	・東日本大震災	C- よりよい学校生活、集団生活の充実
40	<u>命を守るために (日本文教6)</u> ・「命を守るため」の行動例が、場合に分け、示されている。／人間には「自分だけはだいじょうぶ」という心理が働きやすいことや、「津波でんでんこ」の意味が紹介されている。	・東日本大震災	※コラムのため、内容項目との対応なし
41	<u>上村さんのちょうせん：ひさい犬と共に (日本文教6)</u> ・犬の訓練士の上村さんは、福島県出身の犬「じゃがいも」を災害救助犬にしようとする／テストに何度も落ちるが、11回目ようやく合格／その姿は故郷を勇気づけた。	・東日本大震災	A- 希望と勇氣、努力と強い意志
42	<u>自分にできること (日本文教6)</u> ・震災後、被災地にボランティアとして派遣された島田さん／自分の知識や経験で子どもたちを元気にしたいと意気込むが、思ったようにはいかない。	・東日本大震災	C- 勤労、公共の精神
43	<u>ありがとうの気持ちをこめて (光村図書3)</u> ・震災後、町の復興に従事する警察や自衛隊の人々／姉弟は、朝夕、感謝の思いであいさつ、声掛けをする。	・東日本大震災	B- 感謝
44	<u>神戸のふっこうは、ぼくらの手で (光村図書4)</u> ・大震災のあと、避難所ではボランティアが行われている／小学生の「ぼく」も自分にできることを考え始める。	・阪神・淡路大震災	C- 勤労、公共の精神
45	<u>自分の身は自分で守る (光村図書5)</u> ・地震を想定した避難訓練／校長先生は「自分の身は自分で守る」必要性を説く。	・東日本大震災	A- 節度、節制
46	<u>おばあちゃんからもらった命 (光村図書5)</u> ・広瀬めぐみさんは、中学3年生のときに、阪神・淡路大震災にあり、祖母を失う／祖母はめぐみさんを守って亡くなった／自責の念を抱える中で、めぐみさんは介護の仕事という夢を見つける。	・阪神・淡路大震災	B- 感謝
47	<u>五十五年目の恩返し (光村図書6)</u> ・阪神・淡路大震災で被害を受けた神戸に、「米のユダヤ人団体」が「スギハラ基金」を設置して、支援をしてくれた／それは55年前に、ナチスの手から逃れるユダヤ人にビザを発行した杉原千畝の功績に対してであった。	・阪神・淡路大震災	B- 感謝